

若松伸哉（日本文化学部国語国文学科）

『わたしと世界を象ることば

—昭和一〇年代の石川淳作品とその周辺』

（2019年10月、翰林書房刊）

*2019年度愛知県立大学出版助成

目次

序章 昭和一〇年代の幕開け

第一部 昭和一〇年、石川淳の登場と初期作品

第一章 多重化する〈わたし〉の試み—石川淳「佳人」

第二章 下層民を描く位置—石川淳「貧窮問答」

第三章 漂泊の強度—石川淳「葦手」

第四章 芥川龍之介の影を追う—石川淳「普賢」と安吾・太宰

第二部 戦時下の石川淳・太宰治・坂口安吾

第五章 再生の季節と作家—太宰治「富嶽百景」

第六章 グロテスクな愛の射程—坂口安吾「紫大納言」

第七章 〈歴史と文学〉のなかで—石川淳「森鷗外」

第八章 オルタナティブな歴史の語り方—太宰治「右大臣実朝」

終章 焼跡からの出発—石川淳「焼跡のイエス」

おわりに

概要

本書は昭和期に活躍した小説家・石川淳について、彼の作家活動のスタートにあたる昭和10年代の作品を考察することにより、石川淳の文学作品と同時代社会との関連を考察したものである。また、本書が企図するのは、石川淳という個別の作家論に収斂させることではなく、石川淳と同時代に活躍した太宰治などの小説家の作品もあわせて論じることにより、同時代の社会状況とも密接に関わりながら文学作品が生産されていった昭和10年代の文学潮流の具体的な一面を明らかにして、いまだ研究が途上である昭和10年代の文学と社会という問題についての研究的基盤の構築に向けた論点を提示することである。

上記のコンセプトに沿いながら、本書では昭和10年から昭和11年にかけて発表された石川淳の初期作品をまず扱う。第1章では石川淳のデビュー作「佳人」について、当時文壇で話題となっていた海外の文学思潮を取り込みながら、同時代文壇における小説改革の声にも対応した作品であることを、同年月に発表された「道化の華」など太宰治の初期作品もあわせながら論じる。第2章では石川淳「貧窮問答」が、武田麟太郎作品のパロディとなっている点を指摘し、同時代の文壇における庶民を描くリアリズムの問題と関連させて論じ、第3章では石川淳「葦手」について、文壇における散文と韻文の問題や、勃興しつつあったナショナリズムの問題との関連性を述べ、同作品の持つ社会的な批評性を論じた。第4章では石川淳の代表作である「普賢」について、およそ10年前の芥川の自殺が改めて再論される同時代の文壇状況を確認しながら、理想と現実という小説記述の理念にかかわる問題が具体的に看取されることを論じる。各章とも同時代資料を博捜し、具体的かつ実証的に対象作品と関連付けた分析となっており、本書を貫く研究方法となっている。

本書の5章以降では、昭和12年の日中戦争開始後から終戦直後を対象期間として、石川淳のほか、彼と関係の深い太宰治や坂口安吾の作品を扱う。第5章では戦時体制への移行とともに日本社会で叫ばれる〈革新〉や〈再生〉の言葉を確認しながら、〈太宰治の再生〉とも評される「富嶽百景」の同時代的戦略を論じ、第6章では、やはり戦時体制移行期の文壇言説に見られる〈愛情〉というトピックに注目し、坂口安吾「紫大納言」におけるいびつな愛の物語の批評性を論じる。また第7章と第8章では、それぞれ戦時下に活況を呈する〈歴史と文学〉という問題系を補助線として、石川淳「森鷗外」や太宰治「右大臣実朝」における歴史的人物を描くということの同時代からの偏差およびその批評性について論じる。そして終章では敗戦直後の上野の浮浪児を描く石川淳「焼跡のイエス」について、当時流行した〈ヒューマニズム〉のあり方を探りつつ、同じ時の太宰治や坂口安吾の文学的営為もあわせて、同時代への批評性と意義を論じる。以上のように本書の5章から終章にかけては、総力戦下と敗戦直後という未曾有の社会状況のなかで発表された上記の作品について、その社会状況とも連動した文壇の動きやトピックを探りながら、そうした問題と接するこれらの作品のあり方を明らかにし、社会に向けられたその批評性について考察していくが、それらを同時代資料の提示により実証的に論じることが一貫した方法となっている。

本書は上記の方法に拠りながら、論じる対象の作品だけでなく、その同時代文壇の具体的なモードの一端を浮かびあがらせるとともに、文学と社会の関係について論じる。